

D.C. グリーンの『Tenrikyō』（4）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

今回は、前回（本誌 12 月号）に引き続き、1895 年 5 月 22 日に日本アジア協会の例会で行われた D.C. グリーン氏による天理教論文についての発表に関して、『The Japan Weekly Mail』の 1895 年 6 月 1 日号に掲載された記事の後半の内容について見ていきたい。以下はその抄訳である。

グリーン氏は、天理教の道徳的な面について、次のように説明した。同氏の分析によれば、天理教は道徳的運動である。オミキの教えが到達した倫理的レベルは高いとは言えないが、その教えは人々がよりよい人間になることを目指すものであり、信者たちは彼女の足跡を辿っている。天理教が、その非道徳的行為に対してしばしば激しく非難されているのは確かである。また、道徳的に問題があると考えられる側面があることは否めないだろう。しかし天理教に反対する者たちのなかでも同様な点は見受けられるのであり、現在の天理教の規範と実践はこの種の批判を受けるものではない。天理教の初期においては、男性と女性と一緒に踊ることが行われていたかもしれないが、今ではそのようなことはないのである。

次にグリーン氏は、天理教におけるキリスト教の影響について述べた。オミキがキリスト教から意識的に何かを得たということはないが、ザビエルやその後継者たちの教えの影響は、おそらく天理教だけでなく黒住教や他の一派にも見られるだろう。日本の宗教史についてさらに研究が進められるまでは、この質問に対して明確に答えることはできないが、天理教の信者は教えを説く際にキリスト教の教えを借用しており、なかには聖書を学んでいるものがあることは明らかである。

続いてグリーン氏は、天理教の信仰活動、布教活動、教会組織について説明した。天理教会での礼拝の根底にある教義理論によれば、親である神が最も喜ぶのは子供の幸せな様子を見ることである。したがって、陽気で幸せな心を表現することが一番心のこもった礼拝となる。祈りの内容そのものが重要ではないわけではないが、礼拝において踊りと音楽は非常に特徴的なものとなっている。説教は、天理教教会での活動の大きな部分を占めている。これは天理教の教えを伝えていくための主要な方法となっており、教会だけでなくさまざまな場所で行われている。

また天理教では信仰治療が強調されている。目覚ましい成果が現れており、この点に関しては疑う余地はない。神の恩寵を受けるための一つの手段として金銭的な施しが行われることもあるが、これが天理教の急速な成長の主な要因となっているわけではない。その急激な発展の理由は、信仰治療に対する一般の人々の信仰にあるといえる。その背景には、伝統的な宗教教団に対する不信感、あるいは関心の喪失があると推測される。新しい指導者を求めている人びとは、天理教の説教者たちの熱意と目に見える奇跡的な力に精神的権威の証拠を見いだしている。

天理教の最高権威者は三島村の管長である。しかし、主要都市には分教会と呼ばれる信徒集団を統括する分教会長が存在し、より小さい信徒集団である支教会に対しての監督権をもつ

ている。また各支教会にもそれぞれ長がいる。東京には 2 つの分教会とおそらく 15 カ所の支教会がある。説教者は分教会や支教会の会長の推薦を受け、管長によって任命される。説教者の数は非常に多く、おそらく東京だけで 100 名以上いるだろう。管長は別として、これらの教会長や説教者たちはいかなる報酬も受けておらず、教会の運営はすべて自発的な労働によって行われている。

最後にグリーン氏は、天理教の前途について次のように述べて報告を締めくくった。この天理教の成長はまだ頂点へ達していない。しかし、教義や信仰における合理化の傾向はすでに明らかであり、教えの超自然的な側面における信仰が早晚弱められ、組織は衰退へと向かっていくであろう。この教団がたといかに短命であったとしても研究に値することは間違いないが、日本の宗教史において一つの章を占める存在にまでなるかどうかはまだわからないのである。

この『The Japan Weekly Mail』1895 年 6 月 1 日号の記事には、グリーン氏の発表が終わり、例会の議長が協会を代表してグリーン氏に特別の感謝の意を述べ、しばらく活発な質疑応答が行われた後、午後 5 時半に例会が終了した、とある。また当時、日本の宗教に関する論文を執筆する際に必要な資料を得ることは決して簡単なことではなく、この天理教に関する研究論文がいかに困難な状況下で執筆されたかを想像するに難くない、と結んでいる。

以上、グリーン氏の論文『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』（天理教一天の理の教え）が『日本アジア協会紀要』1895 年 12 月号で発表される半年以上前に、日本アジア協会の会合でグリーン氏が天理教について報告した内容について見てきた。また同氏は、当時ニューヨークで発行されていた週刊誌『The Outlook: A Family Paper』でも天理教について言及している。同誌 1896 年 1 月 25 日号への寄稿「The Religious Outlook in Japan」のなかで、明治維新を経た日本の存在感が国際社会において徐々に明らかになってくるにつれて、欧米社会では日本の軍事や経済のみならず社会や文化にも関心が寄せられるようになり、日本の宗教事情を知ることが意義がある、と述べている。そして、伝道宗教の神道や仏教について紹介したうえで、日本におけるキリスト教伝道の歴史と現況について概説している。さらに、現在さまざまな教派神道が現れてきているが、この根底にはキリスト教系の新宗教であるクリスチャン・サイエンスと同様の現象があるのではないかと分析。その代表格として唯一天理教の名前を挙げ、天理教には一神教という側面がみられ、また一般民衆に広く受け入れられていると紹介している。しかし、大衆への迎合や教義の合理化により早晚その魅力が失われていくであろうとの予想を記している。グリーン氏は、その他の日本の倫理や思想についても言及しているが、このように当時の日本の宗教事情を概説するなかで、仏教、神道、そしてキリスト教とともに、特に天理教の名前を挙げているところから、当時の同氏の天理教に対する関心のほどがうかがわれるのである。